第 8 章　広域支援の可能性
―北海道岩見沢市の「温もり届け隊」の活動から―

8.1 設立の背景と経緯

どんなにつらかろう。せつなかろう。言葉で表せない大変な日々を送っている震災被災地の人々に、追い打ちをかけるように雪が舞います。

そうだ、私にもできるボランティアがあると思いつきました。靴下カバーを編むことです。早速、古毛糸を引っ張り出し、編み始めました。簡単で、サイズもそれほど気にしなくていいので、テレビを見ながらでも編めます。

毛糸で暖かいし、手編みの物には既製品にはないぬくもりがあります。それに、私のように静脈瘤があって足首を締め付ける靴下が苦手な方にもはけます。

友人、知人に声をかけると、「母の残した毛糸ですが･･･」「我流の編み方でもいい？」と、ぬくもりの輪が広がっていきました。「ぬくもり届け隊」のスタートです。

一人で編んだり、ご近所さんとは定期的に集まり、毛糸の山を前に、それぞれ配色を見比べながら編んでいます。今シーズンには間に合わなくても、1 年間かけて編み続け、被災地に届けたいと考えています。

これは発災から 1 ヶ月も経たない、2011 年 4 月 1 日付け『北海道新聞』で掲載された「靴下カバー編み　広がる支援の輪」の全文である。これを投書したのは渡辺紀子（みちこ）氏である。同氏は 1940（昭和 15）年に沼田町に生まれ[1]、天使女子短大を卒業後、南幌高校の 1・2 期生に家庭科を教えるなど、5 年間の教員生活を経て結婚後専業主婦となった。祖母の介護をしつつも、平成初頭に自宅を私設図書館「こぶしっこ文庫」として開放し、また人形劇団「こぶしっこ」を立ち上げていた。人形劇は年 40 回、主に道内で行い、年に 2～3 回ほどは遠方で泊まりがけによる公演を行うなど、多忙な日々を過ごしていたといえよう。

そうした生活を送るなかで「東日本大震災」を遠く北海道の地で知ることになったのである。

震災のニュース報道をみて「寒そう」と感じ、「靴下なら編める」と思った。身近なのが町内会だったので、その中で声をかけたのが 3 月 14 日だった。こぶし町会はそれまで町内同士で仲がよく、めぼしい人に声をかけた。町内だけで 10 名くらいで、今でも 5 名活動している[2]。

町会ベースで自分が中心となって始めることにした。その後 4 月 1 日の新聞に活動内容が掲載された。この記事掲載が大きなインパクトになった[3]。

このように立ち上げ自体が発災から 3 日後とかなり早い段階であったことがわかる。同氏が民生委員をやっていて、その関係で別の町会の人と知り合いになったのも声かけの範囲が

拡がった一つの要因ともいえる。ここで留意すべきは「町会」がその起点になったことで、そこから「個人的な関係、人形劇サークル仲間、福祉センターなど」へ拡大していくのである。本章では被災地から遠く離れた場所からのいわゆる「広域」支援の可能性について、この温もり届け隊を起点に検討していくことにする。まずは次節では 3 月に活動がはじまり、ある程度の活動状況が落ち着くであろう約半年間について確認することとする。

8.2 初期の活動と広域ネットワーク形成の萌芽

さて、町内の告知を行った後、22 日に町外への告知のために「チラシ作成・印刷」を行っていることがわかる（表 1）。

表 1　2011 年 3 月下旬の活動[4]

3月	活動
22日	チラシ作成（500枚）、配布2ヵ所、町内5軒
23日	チラシ配布、3ヵ所
25日	出前文庫で配布。TKさんが親の古毛糸提供。3ヵ所で配布
26日	7ヵ所で配布
28日	2件電話有。ボランティア組織ぐるみで取り組む。4月の総会で本決定を町内会の集い　3名
29日	出前公演でPR、町内8軒、道新より電話有
31日	KIさん　近況報告、作り方説明
	IZさんより電話有。友人の毛糸他を送付するとのこと

チラシについてであるが、以下の内容であった。

募集中
手づくりくつ下カバーを被災地へ

くつ下カバーを編んで下さい
（見本以外の作品や靴下やレッグウォーマーなどでも可能）
毛糸、あみ針を寄贈して下さい
（サイズ、色、量は問いません）
ステーションにご持参下さい
(1)　岩見沢演劇鑑賞会　平日　13 時～17 時　日祭休み
(2)　岩見沢おやこ劇場　火、木、金　10 時～15 時
(3)　ファームカフェ・ソラ　火と第二、第四月は休み。JR 幌向駅前
（只今、この他のステーション募集中です）
※グループ、婦人部会などへ、編み方講習へ伺います。
作り方、その他の問い合わせ先：
こぶしっこ支援（渡辺）電話番号、住所

このように「認知拡大・浸透」を図るための活動といったことがこの時期に行われた。

さて、コメントにもある冒頭に記した 4 月 1 日掲載の記事は大きな反響があったようだ。渡辺氏が残しているメモによれば、以下の問い合わせがあった（表 2）。

表 2　4 月 1 日記事等による問い合わせ一覧[5)]

	氏名	住所	備考
4月21日	KU		編み図FAX送信
4月22日	KO	南町	カバー有、毛糸も有
	KI	三笠市	地図、編み図FAX
	SA	幌向南	
4月25日	IS	上幌向北	JR、バスにて来訪
4月27日	KA	栄町	栄町会館の先
4月30日	IK	苫小牧市	
5月2日	MI	栗山町	来訪し編む（ご主人の送迎）
5月8日	UE	北2	毛糸宅配
5月9日	TA	桜木	毛糸届けてほしい
	HA	7条	
	SI	上幌向	
	KA	日の出台	バス停のチラシ、カバー30足
5月11日	KI	緑が丘	17日、第一町内会婦人部に呼びかける
5月16日	KR	日の出台	KAさんと一緒に来る

住所からほぼ岩見沢市内であることがわかるが、三笠や苫小牧などの市外からの問い合わせがあったことは今後の展開の萌芽になっていく。新聞掲載で反響があった活動であるが、その 4 月の動きを見ていこう（表 3）。

表 3　2011 年 4 月の活動[6)]

4月	活動	4月	活動
1日	8時過ぎ、YA氏より電話。「仲間に入れて」とのこと	18日	こぶし町会
	見本を渡し、作り方を説明する		UE氏より毛糸1袋届く
	Hクラブ：知人に声かけで集まるので14日作り方講習を開催		DE氏：毛糸情報の電話
	NA氏とYA氏と話をする		AN氏：町会婦人部で取り組む
2日	YA氏：自分のカバーの閉じ方などを習いに来る	19日	道新空知版に載る。6件の問い合わせ有
3日	YA氏：仕上げについて		夕張、栗山他、講習会増便
4日	OD氏：靴下2足、カバー4足持参（母の手編み）	20日	MI氏から電話、取りにうかがう。靴下カバー20足、古毛糸
	5名来訪、毛糸持参、編み方指導		HA氏：古セーター、毛糸、2,050g
5日	SA氏：毛糸1袋	24日	町会にチラシ配布
	IZ氏：足下カバー（完成品）	25日	上幌向のHA氏来訪
6日	市外へのチラシ配布依頼		YA氏、MA氏より靴下3足預かる。AN氏、ネックウォーマー持参
	OD氏：靴下2足	26日	電話依頼の南町KO氏に毛糸届ける　35足
	日の出台バス停へチラシ設置（地区会長のOKもらう）		観る会に毛糸、靴下有り（5箱）
	幌向「そら」へ見本、毛糸、針を届ける		幌向の人より電話有。友人が毛糸があれば手伝える
7日	栗山のDE氏、OO氏に編み方指導など		ソラのSH氏よりFAX有。仙台へ荷物発送に便乗してはどうか
	TA氏へチラシ依頼		230足パックする（厚手靴下、カバー270足発送）
	バスセンターで待ち時間中、編み物している隣の人にチラシを渡	27日	ソラに届ける
11日	町会6名	28日	AS氏から毛糸。SA氏から毛糸、靴下2、カバー7、紳士靴下1など
	OD氏：カバー3足		栄町のKA氏から電話。5～6人で編むのでケイトを届けてほしい
13日	こぶしっこ：ヒラリン9足、ポン5足	29日	栄町KA氏へ毛糸届ける。5～6人で集まる
14日	ひよこクラブで講習　5名	30日	SA氏、KU氏より紹介。苫小牧支部をつくる
16日	MI氏より41足届けられた		KI氏、友人とカバー6足、毛糸を届けてくれる

4 月 1 日にチラシをつくった。個人的な関係、人形劇サークル仲間、福祉センター、教会などへ、靴下を片方つけて配布した。福祉センターのチラシを見たのが喜多さん、人形劇関係で美唄、月形に拡がった[7]。

この段階では町会と自身が主宰する劇団関係とその周辺とのやりとりが中心である。渡辺氏がチラシ配布・設置を行いつつ、問い合わせ電話についてはほぼ個別に対応している。その中で出前による「作り方講習」を行ったり、材料となる毛糸などを取りに行ったりしていたことがわかる。

表 4　2011 年 5 月の活動[8]

5月	活動	5月	活動
2日	栗山のMI夫の送迎で1日中で片方仕上げる。毛糸持ち帰る	20日	KO氏より電話。毛糸フェルトサークルにFAX
	上幌向のIS氏、2人でランチ。MIさんの車で帰宅	22日	旭川から電話。毛糸送る
9日	TA氏へ毛糸届ける	23日	初・KI氏。三笠より20足届けてくれる。友人と編む
	AN氏、SU氏が弁当持参で来訪		初・NA氏。幌向より50足持参。目標クリア
	初・SI氏、自宅の毛糸で閉じ方など分からない		NA氏、黒毛糸6束持ち帰る。毛糸寄贈者へのお礼
	ISさん3回目		AN氏、YA氏、NA氏、SA氏、KA氏、SI氏、NAの車で帰る
	初・KA氏、カバー、20足持参、毛糸持ち帰る		WAより古毛糸寄贈
13日	栗山のMI氏、母と来訪。10足、毛糸持ち帰る	30日	AN氏、YA氏、KI氏、IS氏
15日	栄町のKA氏来訪（カバー29足）		WA婦人、古毛糸どっさり
16日	AN氏、SU氏、SI氏、YA氏来訪	31日	KO氏へ毛糸届ける。20足
	NA氏、SA氏、KA氏、NA氏、KA氏、新・KA氏　15足		観る会、毛糸引きあげ。2足
	糸繰り器があるので、と毛糸持ち帰る		
19日	NHK取材　TA宅で9人		
	TA氏より電話有。岩見沢にうかがうことも可とのこと		

5 月の活動もほぼ同様であるが、それまでは毛糸を持ち帰って自宅で編むことがメインであった活動も、何人かが集まって編むスタイルがこの時期に形成されつつあった（表 4）。

6 月が活動の一つの転機となる（表 5）。26 日に S 美容室で「カット後、無料コーナーを見学」となっており、その夜に 2 階にあるコーナーを使ってもよいとの連絡を受けている。また 30 日にも、市内にあるふれあい館でも開催されている。

表 5　2011 年 6 月の活動[9]

6月	活動	6月	活動
4日	KA氏15足、毛糸取りに来る	15日	栗沢のTA氏毛糸1箱
	700突破	18日	KA氏（＋4人で）51足、毛糸持ち帰り
6日	HA氏、毛糸寄附	20日	AN氏、KA氏、久しぶり15足
	YA氏、NA氏、NA氏、KA氏		NA氏、IS氏、YA氏
	桜木のTA宅へ毛糸届ける		KI氏、YA氏、NA氏、KA氏、AS氏（初）、15足届け
7日	N社の地域福祉資金の電話をする	21日	7条のSA氏へ毛糸届け（TA氏紹介）
10日	道新より電話。毛糸を送りたい人がいる	25日	とじ方教える
	AN氏の友人より、毛糸届く		カット後、中の店の無料コーナー見学
	KI氏、初・加藤氏		夜TA氏より電話有。2階使ってよいとのこと
	初・加藤氏、カバー5足、毛糸、針持ち帰る	27日	AN氏、KA氏（50足）で1,000足に
13日	AN氏、KA氏（26足）		SA氏、YA氏、KI氏、KA氏、YA氏
	YA氏、NA氏、KA氏、NA氏	30日	ふれあい館　緑が丘1丁目婦人部他
14日	生協福祉基金申請		

このふれあい館であるが、岩見沢市のあやめ公園内にある管理事務所であり、無料で使えるところである。5 月 11 日に問い合わせをした緑が丘の KI 氏が町内会婦人部などに声をかけて活動をしている。

> *会場を無料で借りられるようになるまで大変だった。この団体の趣旨をわかってくれるまで大変だったのだが、この会場（ひなた広場）がタダで使えるようになってから集まりやすくなった[10]。*

まずはこの美容室の 2 階とふれあい館が活動拠点となったが、活動が今のかたち（月 3 回を「であえ～る」と「ふれあい館」の 2 ヵ所で開催）になるまでにはもう少し時間を経ないとならないようだ。

7 月については以下の通りである（表 6）。7 日に先の美容室の 2 階で初開催されている。また、ふれあい館についても 8 日に 9 名が参加し、その時に翌月 11 日と 25 日開催を決めている。

表 6　2011 年 7 月の活動[11]

7月	活動	7月	活動
1日	チラシ配布（S美容室、他3ヵ所）	11日	AN氏、KA氏、KU氏、SA氏
4日	AN氏、KA氏、雨の中自転車で		YA氏、KA氏、SA氏、NA氏
	YA氏、KA氏、YA氏、KI氏		KA氏、50足
7日	Sステーション　10時～15時	14日	礼状（岐阜県のNA氏、札幌のTO氏）
	SA氏、IS氏、SA氏（TA氏休み）	26日	AN氏、NA氏、KA氏、YA氏
8日	ふれあい館　9名　緑が丘町会5名、他新1名		芦別のMA氏より毛糸届く。お礼の電話する
	次回8月11日、25日決める	27日	KA氏、65足
9日	桜木のTA氏、一区切り40足	28日	おやこ劇場より毛糸
	パーク仲間YA氏、9足		

8 月の活動であるが（表 7）、S ステーションとふれあい館でそれぞれ開催されている。また、新聞記事にも掲載されているほか、バザーの参加可否について検討を行っていることも注目される。結果としてバザーは「準備不足」とのことで不参加になった。

表 7　2011 年 8 月の活動[12]

8月	活動	8月	活動
1日	YA氏、SA氏、KA氏	21日	KA氏来訪。すぐ帰る（毛糸のみ持参）
4日	Sステーション、IS氏、SA氏、SU氏、SA氏	24日	プレス空知、トップに載る
5日	福祉センターに毛糸、箱を寄贈	26日	読売新聞より電話有
	IS氏より電話。コールセンター所長に打診		日の出南町会よりカバー85足、毛糸届ける
9日	南幌町のIG氏に見本（片方）と編み図送付	27日	読者より電話。仲間に入れてとのこと（1人）
11日	ふれあい館で開催。9月日程決定（第2、4木）		新川のSA氏、カバー取りに来てとのこと
	バザー打診（KU氏）カバー20足を200円で売る	28日	バザー、準備不足ということで不参加
	プレス空知取材	29日	AN氏
18日	Sステーション、盆明けなので少ない。自分とISさんのみ		SA氏、KI氏、NA氏、YA氏、KA氏、SA氏
	HI氏、カバー30足。店に預ける		

活動記録として残っている最後の 9 月分（厳密には中旬まで）である（表 8）。大きな動きとしては、ふれあい館に一本化して毎月 1 回第一木曜に開催することになったことと、岩見沢市との関わりができはじめたところである。

表 8　2011 年 9 月の活動[13]

9月	活動	9月	活動
1日	Sステーション、初・FU氏。SA氏、近所の人から毛糸預かる	13日	道新朝刊
8日	ふれあい館10人くらい。編み図コピー 受付の人「空知プレス記事」のコピーで市と交渉しては」 14時終了後、KI氏と市へ。郵送料は無理、情報収集を	14日	プレスに記事。市長が会いたいとのこと。「28日はどうか」と電話 洞爺の人からカバー50足
9日	市よりHPへ載せる写真をとりに来る KA氏、毛糸とカバー24足	15日	Sステーション、ラスト。FU氏、SA氏、IS氏、SU氏、SA氏、SU氏 毎月1回、ふれあい館で開く。第1木、9時45分西友横付	
12日	AN氏 荷造り作業、IS氏、SA氏、KA氏、KI氏、YA氏。1,500ずつ 道新、プレス取材	16日	ソラへ毛糸届け。カバー預かる	
		17日	栗山からDE氏一行、カバー1,300（10包）、寄附金持参	

震災から 6 年を迎えた 2017 年に至るまで続いている「温もり届け隊」の活動の原型があらかたこの時期に決まったといえるだろう。さて、こうした活動によりつくられた編み物（靴下カバーなど）はどのように被災地に送るようになったのか。2011 年 11 月 5 日にさいたまスーパーアリーナで行われた「コープフェスタ 2011」で温もり届け隊が双葉町に 500 足贈呈した経緯について、少し長くなるが、『埼玉新聞』（2011 年 11 月 6 日掲載）の「温もる足元　深まる絆　双葉町民に靴下カバー」の記事を紹介しよう。

> *課題もあった。完成した靴下カバーを、どのようにして届けるかだ。渡辺さんは岩見沢市役所に相談。職員が各地でさまざまな活動に取り組む全国の公務員でつくる「地域に飛び出す公務員ネットワーク」にアイデアを求めたところ、事務局を務める加藤ひとみさん（61）が協力を申し出た。加藤さんは元県職員で、今年 4 月から JR 東日本商事に入社。同社も靴下カバーを入れる袋の調達やメッセージの印刷を買って出た。*
>
> *（中略）加藤さんの紹介で、さいたまコープと県ユニセフ協会も仲介役として参加。双葉町民が避難する加須市の旧県立騎西高校や福島県南相馬市で支援を続けているさいたまコープが、2 千足の配布を引き受けた。*

活動を開始して約 8 ヶ月の段階で、近所の趣味仲間とその延長による被災地支援ボランティア・グループが他地域のネットワークと恒常的につながるという意味での「広域」支援のネットワークが構築されたといえないだろうか。

「さいたま」で行われたこのイベントはもう一つ、温もり届け隊にとってネットワークを拡大する大きな契機が「結果として」潜んでいた。それが当時、埼玉県越谷市に拠点を置いて活動していた「一歩会」である。この会を概説すると、原発事故により楢葉町から越谷市に避難していた新妻敏夫氏（会長）と「震災後、支援やボランティアに違和感があった」[14]

と話す安齋作子氏（事務局）が震災後 2 週間後に発足させたものである。会のねらいとしては、（一方向的な）被災者支援だけでなく、「呼び水をしても、余計なことはしてはいけない」[15]、「福島（南相馬、いわき）からの人たちを支援すること、遠方の人たちに楢葉など（双葉郡）を、顔が見える形での交流などを通じて知ってもらう」[16]という、前者は支援漬けにするのではなく「自立」に向けた取り組みを、後者は（相互の）交流というように、大きく二つのコンセプトを垣間見ることが出来る。詳細についてはあらためて論じるとして、「自立」と「交流」を旨とする一歩会が、交流を通じて自立した活動になりつつあった温もり届け隊に「つながる」のはある意味で必然といえよう。ただ、「すぐに」というわけではなかったのはなかったのは以下の理由による。

> *最初に送った JR 東日本とかと同じスペースにあったらしいが気づかなかった。町内で編んでいる写真を見て安齋さんから達筆な手紙が来た。あやしいと思って連絡しなかったら（笑）、向こうから連絡があり、その後やりとりをするようになった。2013 年に安齋さん一行がやってきた。その時は編み物をやっている会場に来て昼飯を食べて帰って行ったくらいで、まだ本格的な交流になっていなかった。はじめて 2014 年 10 月に SU さん、IS さんらと 6 人でいわきに行った時、新妻さんと安齋さんが横断幕を持って待ってくれていた[17]。*

このような経緯を経て、2013 年 10 月の「岩見沢と一歩会の輝念日」[18]、その一年後にはいわきへの訪問が実現し、「3 年間で 1 万 5 千足提供」[19]という関係が築かれたのである。

しかしながら、温もり届け隊が「つながる」のは一歩会だけではない。むしろ当初から道内を中心とする「温もり届け隊支部」と銘打つ拡がりが形成されつつあったのである。次節では温もり隊そのものの構成員と「支部」について確認しよう[20]。

8.3 温もり届け隊の構成員とその拡がり

現時点の隊員数は若干の増減はあるものの実質 30 名前後といえる。提供資料によると、各々の所属があり、記載順に「こぶし町会」、「人形劇団こぶしっこ」、「幌向ステーション」、「サークル」、「武田ステーション」、「緑が丘 1 丁目町会婦人部」、「あやめ公園ふれあい館」、「市営住宅サークル」、「日の出南町町内会婦人部」、「栄町ステーション」、「上幌向ステーション」、「個人参加」となっている。そして、渡辺氏の居住するこぶし町会、KI 氏による町会婦人部等、いわゆる地縁組織経由の隊員はある程度活動を継続している（退会していない）ものの、それ以外はほぼ休眠状態であることがうかがえる。

具体的にはどのような隊員がいるのだろうか。その概略を示したのが表 9 である。この調査票を受け取る隊員は月 3 回の「定例会」、年末に開催される「忘年会」などであり、全員に配布されているとは限らないことを予めお断りしたい。

表 9　隊員（構成員）の主なプロフィール[21)]

番号	認知時期	認知経緯	入隊時期	定例会参加	作製個数	1年内活動
1	2011年秋	OO氏 （札幌転居）	2011年	殆どない	585	②
2	2011年	北海道新聞 →TA氏	2013年	月1回	330	①、②
3	2014年	主人	2014年11月	ほぼ毎回	130	①、②、⑤
4	2011年	北海道新聞	2011年	数回に1回	60	①、②、④
5	2011年	KI氏	2011年	ほぼ毎回	150	①、②、⑤
6	2011年*	渡辺氏	2012年		200	③
7	2011年	新聞	2011年	ほぼ毎回	200	①、②
8	2013年	知人	2013年	ほぼ毎回	150	①、②
9	2011年	新聞	2011年4月	ほぼ毎回	300	①、③、④
10	2011年	北海道新聞	2011年	数回に1回	15	①、⑤
11	2012年	市広報誌	2012年	ほぼ毎回	250	①、⑤
12	2012年	友人	2012年	ほぼ毎回	180	①、②、⑤
13	2011年	北海道新聞	2011年	ほぼ毎回	30	①、③
14	2014年	知人	2014年	数回に1回	27	①
15	2011年4月	北海道新聞	2011年	ほぼ毎回	300～400	①、③
16	2011年	友人のYA氏	2011年	ほぼ毎回	280	①、②
17	2013年	北海道新聞	2014年	ほぼ毎回	80	①、②
18	2012年		6月頃	数回に1回	250	①、②
19	2011年夏	新聞	2011年9月	ほぼ毎回	300	①、②
20	2013年	友人	2013年	ほぼ毎回	100	①、②
21	2011年	友人	2011年	ほぼ毎回	400	①、②
22	2011年5月	市福祉センター	2011年5月	ほぼ毎回	100	①、⑤
23	2013年	KI氏	2013年	冬期間だけ	ボール、布草履、寿司	①
24	2013年	友人	2014年	ほぼ毎回	36	②
25	2011年	渡辺氏	2011年	数回に1回	1ヶ月に5～6足位	①、②、④
26	2014年11月	北海道新聞	2014年11月	ほぼ毎回	ミニ座布団 500	①、⑤
27	2011年頃	渡辺氏	2011年頃	殆どない	150	④、⑤

認知時期についてみると、「2011 年」としている人が 16 名と半数以上である。因みに「2012 年」3 名、「2013 年」5 名、「2014 年」3 名であった。認知経路としては「北海道新聞、新聞」が 10 名と三分の一以上であり、その他では「配偶者・友人知人」14 名であった。その中でもとりわけキーパーソンの渡辺氏は 3 名、KI 氏が 2 名となっていた。認知から入退時期にはほとんどラグはないものの、現在の活動の中心的な役割を担う一人となっている SA 氏によると、以下の事情によって遅れて参加したとのことである。

> *2 ヶ月経って渡辺さんに電話してみた。電話の声が明るかった。パーマ屋の 2 階（S 美容室）でその時はやっていたが、ボランティアの日と重なっていたために参加できずに自宅で編むことにした。自宅では 1 年半やっていた。ソラさんが取り次いでくれた。託児ボランティアの件がクリアになった後、（例会に）参加することになった[22]。*

定例会（写真 1、写真 2）の参加も「ほぼ毎回」が 17 名と半数以上となっており、渡辺氏によれば「各メンバー、だいたい座るところが決まっている」[23]とのことである。移動手段の問題や体調により、であえ～るやふれあい館での参加が叶わないメンバーもいて、そうした場合は「殆どない」という回答になる。そうした人たちは他の隊員が毛糸を持って行ったり、編み物を会場に持ってきたりしている。そう考えると、2 つの定例会場いずれかまたは両方に来ている人たちがアクティブなメンバーであり、従って 1 年内活動も「定例会に参加」だけでなく、「フリーマーケット参加」などという結果になる。数年を経て残ったメンバーがほぼ全てアクティブであるものの、「材料調達、発送などの事務局活動に参加」しているのは 8 名である。

写真 1　定例会（であえ～る）[24]

写真 2　定例会（ふれあい館）[25]

このメンバーのほとんどが岩見沢市内であるが、外への拡がりを持つ「支部」にはどのようなものがあるだろうか[26]。

①美唄：直接の知人。人形劇仲間の代表である。大きいお寺で中継点になっている。寺の婦人会で編んで送ってくれる。
②月形：直接の知人。人形劇関係である。
③苫小牧：新聞で見たのだと思う。「〇〇会」と名前をつけて活動している。直接一歩会に送っている。教会関係の集会で時々（岩見沢に）来たりしている。
④洞爺湖：新聞で知ったようだ。個人でやっている。
⑤江別：新聞で知ったようだ。
⑥札幌：元は岩見沢に住んでいた。来ることもある。この人の紹介で最近教会に送ったばかりである。
⑦栗山:人形劇関係の知人。赤十字関係で独自にルートをつくって送ってくれている。
⑧三笠：個人でやっている。新聞で知ったのか？
⑨由仁：新聞で知ったのかと思う。年 4～5 回宅急便で送ってくれる。お店をやっていたかもしれない。80 代だと思う。
⑩長沼：個人的なつながりである。
⑪南幌：新聞を見て連絡を暮れた。お寺、個人、それぞれのルートがある。
⑫夕張：K さん。月 1 回くらい送ってくれるだけである。この人もお店をやっていたかもしれない。恐らく 80 代。
⑬砂川：美唄の人形劇仲間が病気のための帽子をつくってくれていて、その患者の一人。美唄を通して提供してくれている。
⑭稚内：教会かお寺なのかわからないが大きな組織である。結構な数が送られてきたのだが、今は（一歩会から連絡をしてもらい）直接送ってもらっている。岩見沢には来たことがない。

直接の知人、新聞掲載などのきっかけにより「つながり」が形成されているものの、例えば苫小牧や稚内のような遠隔地の場合、一歩会を窓口して送ってもらうようになったために、温もり隊としての直接的な関わりは弱まりつつあるようだ。ただ、「温もり届け隊」の理念に共感して編み物を被災地に送るという目的は果たされており、温もり隊が支部と一歩会を bridging しているといえるとともに、各々の支部がどのような人かはっきり把握していない部分もあり、きわめてゆるやかなネットワークが形成されているといえる[27]。

8.4 広域支援を可能にするものは何か

これまで北海道岩見沢市を拠点とする「温もり届け隊」を概観してきた。会の設立経緯自体が専業主婦の「想い」つきといえるのだが、それが単なる「思いつき」に終わらなかったのは次の 3 つの要因があるものと（現時点では）考える。

一つ目は人形劇や図書館など、ボランタリーな活動を既に行っていたことにある。特に人形劇活動を通じて、外部団体との関係構築や補助金申請などの資金的なやりくりといったノウハウが構築されたものと考えられる。

二つ目は一つ目の前提となっているものといえるが、町内会関係のネットワークを活用できたことである。発災から 3 日後の 3 月 14 日、まず声をかけたのがこぶし町会の知人であり、こうした「近接性」が迅速な活動立ち上げを可能にしたのではなかろうか。

三つ目は外部の人材・ネットワークを模索しながらも有効に活用出来たことである。できあがった編み物をどこに送るかが課題となっていたが、

> *靴下がたまった頃、2011 年秋あたりであるが、送り先を見つけるのが大変だった。KI さんと市役所に行ってもたらい回しで、個人的に知っている職員が 2011 年 11 月 4 日～5 日のコープ+JR 東日本によるさいたまアリーナのイベントを紹介してくれ、まずは見本を送った。このイベントには直接行き、双葉町長に会って配布してもらい、また会場でも配った[28]。*

とコメントが示しているように、「個人的に知っている（市）職員」による bridging が送り先を探索する問題を解決したのである。町会／人形劇／市職員といった人・組織という探索先の広さとそのプロセスの結果としての bridging を果たすことで、同時に直面する問題を解決したといえる。換言すれば、それらがある意味で活動進展の「突破口」となっていたのである。

地理的な「隣」をはじめとした近隣の支援というのは、近接性からの人間関係の難しさという要素を仮に除外すれば、支援物資の郵送料・その時間を考えるまでもなく、広域のそれよりも容易であるのはいうまでもない。ただ、「起こりえない（と思いこんでいた）」災害[29]が全国各地で発生している現状を考えると、リスクヘッジの観点から支援の一つのかたちとして「広域」を念頭に置いた仕組みづくりが求められる。

ただ留意すべきは「域」をまずはどう考えるかである。地域「内」の関係構築が難しい場合、地域「外」とのそれはさらに難しくなるのではないか。インターネットで形成されるようなヴァーチャルな関係ならまだしも、平時とは対局の有事において求められるのは「リアル」な関係である。その最も「リアル」な関係が構築されるのは、本章に即していえば「町会」といった地縁組織なのである。そういった基盤があるからこそ、その後の拡がりが可能になったのではなかろうか。

これには更なる調査と考察が必要であることはいうまでもないが、少なくとも現時点でいえることとして、広域支援を可能にする（一つの重要な要素になる）のは「顔の見える」、そ

して「リアル」な関係なのである[30]。

付記

本稿は温もり届け隊、一歩会による資料提供なくしては成立し得ないものであった。深く御礼申し上げる。

注

1) 『市民プレゼン　ほんわか公論』コーナーの「温もり届け隊の活動」（2013 年 7 月 17 日掲載）のプロフィール欄、同氏からの聞き取りによる。
2) 2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
3) 2015 年 9 月 16 日、同氏への聞き取りによる。
4) 同氏提供資料より筆者作成。
5) 同氏提供資料より筆者作成。
6) 同氏提供資料より筆者作成。
7) 2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
8) 同氏提供資料より筆者作成。
9) 同氏提供資料より筆者作成。
10) 2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
11) 同氏提供資料より筆者作成。
12) 同氏提供資料より筆者作成。
13) 同氏提供資料より筆者作成。
14) 2015 年 1 月 11 日、同氏への聞き取りによる。
15) 2014 年 10 月 20 日、同氏への聞き取りによる。
16) 2015 年 1 月 11 日、同氏への聞き取りによる。
17) 2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
18) 2013 年 10 月 27 日付、安齋氏から渡辺氏への書簡から。
19) 2014 年 10 月 20 日、同氏への聞き取りによる。
20) 本来なら構成員とその活動になるのだが、これについてはあらためて論じたい。2012 年度以降の温もり届け隊の活動を概観すれば、「定例会」、「フリーマーケット出店」、「忘年会」、「被災地訪問／受入」などである。
21) 2015 年冬に主に実施し、その後必要に応じて適宜、実施している。調査方法について調査票を渡辺氏に渡し、各隊員に配布する形態により行った。表中にある「1 年以内活動」については次の通り。①定例会に参加、②フリーマーケットに参加、③視察に参加、④材料調達、発送などの事務局活動に参加、⑤その他。＊については後日、聞き取りにより補足している。

22）2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
23）2015 年 9 月 16 日、同氏への聞き取りによる。
24）2015 年 9 月 16 日筆者撮影。
25）2016 年 2 月 11 日筆者撮影。
26）2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
27）こうしたゆるやかなネットワークの性質は「一歩会」にも色濃くあらわれている。こうした「つながり」方への考え方の（「一致ではない」）相同性が関係の構築とその継続性を生み出しているのかもしれない。いずれにせよ、温もり届け隊だけでなく、一歩会についても更なる調査により詳述することが今後の課題である。
28）2015 年 12 月 26 日、同氏への聞き取りによる。
29）筆者の個人的な経験であるが、2016 年 10 月 21 日「福島の子どもを南幌に招待する会」の副会長に南幌町で聞き取り調査を行い、その中で「全国、どこで何が起こるかわからない。転ばぬ先の杖となるように自分ところから遠く離れた地域と連携が必要ではないか」という話になっていた。ちょうどその頃に最大震度 6 弱を鳥取県の倉吉市、湯梨浜町、北栄町で観測した「鳥取県中部地震」が発生したのである。道内でも 2016 年 8 月に大水害により、十勝地方の交通網が寸断されたのも「これまでに考えられない」レベルの雨量だったからである。
30）やや事情は異なるが、福島県いわき市四倉町にある道の駅よつくら港を運営する NPO よつくらぶ／四倉ふれあい市民会議と同県内会津地方にある三島町商工会等との震災前からの交流と、被災直後の三島町による物資提供や瓦礫撤去等の復旧支援の事例があげられる。各々の中で関係が構築され、それ同士が「つながった」ために平時の地域間交流が果たせたのであり、有事の交流→復旧支援が可能になったのではなかろうか。